

[073] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10194>

出版情報：語文研究. 73, 1992-06-07. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

笹淵友一著『小説家 島崎藤村』

巻を開けば、まず次の言辭が目に入る。島崎藤村(明治5〜昭和18)は初め新体詩人として世に認められ、後に小説に転じ、遂に文壇の耆宿としてその生涯を全うした、と一般に考えられているのではなからうか。著者は、その認識が(必ずしも誤っているというのではない)とした上で(しかし雑誌「文学界」創刊(明治26・1)当時の藤村の関心はむしろ物語・小説にあった)とされる。

その抒情詩時代から既に生きていた『小説家』藤村。そこに目を据え、島崎藤村の全創作活動にわたる『小説家』の歩みの追究を続けて来られた笹淵氏が、その成果を一巻の書物に纏められた。それが本書である。

以下、本書の細目を掲げる。

第一部 藤村文学の視点

「若菜集」以前の物語・小説

藤村とプロテスタンティズム

藤村と大陸文学

藤村と外国文学 —特にトルストイとの交渉について—

藤村の自然観

藤村の文学と「時」

藤村における「労働と文学」—藤村の労働価値観とその軌跡—

近代文学における散文精神の問題—特に藤村について—

第二部 作品論

「緑葉集」—ロマンティズムの挫折—

「破戒」—古典主義者ヒューマニズムの成立—

「春」—ルネサンスへの憧憬—

「家」—古典主義的ヒューマニズムから自然主義への下降—

「桜の実の熟する時」—青春回想による人間失格への抵抗—

「新生」—幻想としての「新生」—

「嵐」—古典主義的ヒューマニズムへの回帰—

「夜明け前」—叙事詩時代を生きた一愛国者の悲劇—

「東方の門」—中世肯定とルネサンスの達成(中絶)—

巨きな視点から、そして、個々の作品に於て徹視的に、『小説家』藤村についての考察がなされた本書が藤村研究の必須文献となろうことは疑いない。また、本書は藤村研究にとどまらず、例えば、詩と小説、或は、抒情性と散文性といった、文学に於ける基本的な問題についても、多くのことを考えさせてくれる書物となっている。

(平成二年一月 明治書院 A5判 四九二頁 九八〇〇円)

白石悌三他著

日本の作家26『永遠の旅人 松尾芭蕉』

「芭蕉のような、存在そのものが作品であるような作家の伝記を(それも作品紹介をかねて)どう書いたらよいのかという迷いがあつた。芭蕉の意図した芭蕉像なら比較的描きやすい気もした。かといつて、そうした芭蕉像と実像とのずれを検証する手だてがあらうとも思えなかつた。」と白石悌三氏があとがきに言われるように、その多くの作品量に反して、俳人松尾芭蕉の素顔を知り得る資料は少ない。その中で、諸作品から読み取れる芭蕉の文学像と、僅かな

資料から可能性として考えられる人間像とを合わせて、生き生きとした芭蕉像を浮き彫りにしたのが本書である。

まず、第一部では「芭蕉が芭蕉になるまで」と題して、その生い立ちから俳諧との出会い、郷里を出て江戸での立机の後、点業を廃止して深川に退隱するまでを記す。

第二部では「芭蕉伝の表をよむ」として、芭蕉庵での「四季発句」、「甲子吟行」、「あつめ句」の詳細な読み、「おくのほそ道」、「猿蓑」、「炭俵」の評訳などを通しての芭蕉像を描く。

第三部では「芭蕉伝の裏をよむ」として、田中善信氏による芭蕉、桃印、寿貞をめぐる問題についての斬新な考察を収める。

しっかりと作品の読みを「表」とし、生身の芭蕉の姿を描いた田中氏の論を「裏」としてひとつの芭蕉像を描き出す、芭蕉研究にとって意義ある一冊である。

(平成三年四月 新泉社 B 6 判 二九一頁 一三六九円)

目加田さくを著 『私家集論(一)』

本書は、奈良朝から十世紀にかけての私家集(漢詩集をも含む)をめぐる、個々の歌人の伝記から家集の性格・詠風まで幅広く考察したものである。

第一章 古代家集では、まず今日その存在が推測できる日本最古の漢詩の家集として、藤原宇合集と、石上乙麿の銜悲藻にアプローチする(第一節 漢詩人の家集)。次に、万葉集によってその名称が知られる柿本朝臣家集・笠朝臣金村歌集・高橋連虫鷹歌集・田辺史福鷹歌集を集成する。また万葉集に載る家持歌を、原『家持

集』と見做して考察し、その視野は万葉集における大伴氏歌人群にまで及ぶ(第二節 歌人の家集―初期私家集)。

第二章 前期私家集は、紀氏歌人群(第一節)と皇室歌人群(第二節)とに分かれる。前者においては、まず貫之・友則をとりあげ、次に淑望・秋峯・有常といった古今集時代の紀氏歌人十三名の歌及び伝記を集成する。また後者においては、王風「おほきみぶり」の指摘とその概念規定を行った後、その「おほきみぶり」が、天皇からその子孫になるに従いどう変わっていくかを考察するため、まず天皇御集として、奈良御門御集から花山院御集まで計九つの家集の性格を考察する。

このように奈良朝から平安朝にかけての私家集について、史料を網羅しつつ多角的に考察を加えた本書は、私家集研究者のみならず、漢詩文をも含めた奈良・平安朝の文学研究を志す者にとって、必読の書と言えるであろう。

(平成三年九月 笠間書院 A 5 判 五八五頁 一九五七〇円)

中野三敏校注 岩波文庫

『色道諸分 難波鉦 ―遊女評判記―』

本書は近世初期の遊女評判記の白眉ともいうべき西水庵無底居士作『難波鉦』を翻字し、注と解説を施したものである。従来『難波鉦』の翻字には改題後印本である「諸分店卸」を底本として『江戸時代文芸資料』第四に載せられたものがあつたが、本書の解説にも述べられるように極めて不備なものであつた。また、それ以外は影印であり、一般の読書や研究に不便であつたが、本書のように正確

な翻訳が文庫本というかたちで手軽に手にはいることになったのは歓迎すべきであろう。

脚注は原則として簡単な語注であるが、本文を通読するに十分なものであり、特に遊里での特殊な語彙に詳しい。

解説は三十一頁にも及ぶもので、廓と遊女評判記の沿革に始まり、その後用語の解説として、(一)廓内居住者について・(二)客について・(三)心中だて・(四)物日、紋日について・(五)遊びの費用について、の五項目にわたる詳細な用語解説が続く。その用語解説も無味乾燥なものではなく、評判記の呼吸をふまえた読み物となっている。

本書の語注や解説の主眼は、評判記の世界つまり廓の内部の出来事、客と遊女との駆け引きの呼吸を彷彿とさせることにあるようである。読み方の一例は解説冒頭に著者によって示されており、あとは読者がそれにならい語注を参照しながら本文を味読すればよいであろう。そのために必要な語注は十分施されている。また、『難波鉦』の挿し絵の下に施された解説や、解説中に引用されている揚屋吉田屋などの多くの図版もその助けとなる。

(平成三年十月 岩波書店 二七三頁 五七〇円)

井上敏幸他校注 新日本古典文学大系76

『好色二代男・西鶴諸国ばなし』

本朝二十不孝』

『西鶴諸国ばなし』に井上敏幸氏による新しい注解が付されるこ

ととなった。

『西鶴諸国ばなし』は、大本五卷五冊各巻七話計三十五話よりなる短篇小説集であるが、話題が多岐にわたり、また内容も比較的わかりやすいため西鶴の入門書としては最適なものであるといえる。

注釈書も多く、『定本西鶴全集』(暉峻康隆氏)、『日本古典文学全集』(宗政五十緒氏)、『対訳西鶴全集』(富士昭雄氏) 桜楓社本(江本裕氏)等が出されている。本書は『西鶴諸国ばなし』を長年にわたり研究してきた井上敏幸氏による、それら諸注釈を全てふまえた上で氏独自の見解を示したものであり、新見に富むものである。一例を挙げれば「忍び扇の長歌」における伊勢物語的雰囲気指摘は卓見といえるべきものである。

『西鶴諸国ばなし』の研究は、その性質上原拠探求に重点が置かれてきたが、今後はそれらのうちのどれが真に原拠たり得るか、また原拠たり得るとすればそれがどこまで作品の読解に資するか、ということの吟味が必要であるように思われる。本書の刊行により、研究の一層の進展が期待されることである。

(平成三年十月 岩波書店 A5判 五六三頁 三九〇〇円)

佐々木雄爾著 『森鷗外 永遠の希求』

昭和五十一年から六十二年までの間に発表された、佐々木雄爾氏の鷗外に関する研究報告を纏めて成った本書の、目次は以下の通りである。

序

一 老年文学

二 死・墓・年譜

三 軍医

四 反俗

五 学問

六 史伝(その一) ▲史伝の性格▼

七 史伝(その二) ▲史伝執筆の動機▼

八 史伝(その三) ▲史伝の魅力▼

九 史伝(その四) ▲史伝の退屈さ▼

十 性癖(その一) ▲性癖への執着・秩序志向・自尊心▼

十一 性癖(その二) ▲簡素嗜好・遺言の解釈・植物愛▼

十二 思想(その一) ▲悲哀感・空虚感・無常感▼

十三 思想(その二) ▲「諦念」・「傍観」・「あそび」▼

十四 思想(その三) ▲「かのやうに」・「厭世観」・「空車」の解釈▼

十五 思想(その四) ▲「日の要求」・「献身」・「宗教観」▼

十六 夢

鷗外研究の書は数多くある。が、かくまで徹底して鷗外その人に寄り添った書物は稀であろう。本書のこのかたちこそは、著者佐々木氏の立場を明示するものであり、氏は「序」に次のように記される。(現在の鷗外研究に見られる傾向の一つとして(中略)鷗外の私的、公的体験、あるいは政界、医学界、文学界の時事問題に対する反応など(中略)についての検討は詳密の度を加えているのに対して、鷗外の先天的な気質や性格の特異性、およびそれに根ざした人生観、作品の基本的性格などについての考察は疎略の感があ

る。本書は後者に重きを置いた、一読者の鷗外試論である。

〈一読者〉の、篤実な、人間森鷗外への接近の試み、それが本書である。

又、鷗外作品を〈老年文学〉と規定するといったユニークな視点の提示されてあることも〈一読者の鷗外試論〉たる本書の特色として見逃すことが出来ない。

(平成四年三月 河出書房新社 A5判 三二二頁 三五〇〇円)

今井源衛著『源氏物語への招待』

本書は、書名からは一般の読者を対象に編まれた『源氏物語』案内の観を呈するが、一般的な概説の枠を超えて、作品の持つさまざまな問題点を、わかりやすい語り口でしかも鋭く示す。全体は二部より構成されており、章立ては次の通りである。

〔源氏物語の世界〕 はじめに／あらすじ／物語の伝統／主題と構想／主人公、光源氏／源氏物語の表現／柴式部の生涯〔源氏物語を探る〕 一 物語の時代設定／二 ユーモアの諸相／三 引歌・引詩の技法／四 愛のかたち―ものまぎれ〕の实体／五 宮廷行事の役割―行幸について／六 「蜩」巻の物語論／七 女三の宮物語の発端／八 「雲隠」巻の謎／九 宇治の大君の死／十 従者たちの役割／十一 「夢浮橋」巻

の結末

「あとがき」に著者自身が述べているように、前半「源氏物語の世界」は『完訳日本の古典 源氏物語』(小学館刊)第二冊目(一九八三年刊)の「解説」であり、後半「源氏物語を探る」の「四 愛

のかたち―『ものまぎれ』の実体」を除く十編は、同じく『完訳日本の古典 源氏物語』十冊の「巻末評論」による。四については、『源氏物語』を読む』（一九八九年、笠間書院刊、共著）中の「物のまぎれの実体」からとられている。

これらの論考には、『源氏物語』研究の第一人者である著者ならでのさまざまな問題提起が含まれており、従来の固定概念にとらわれがちな一般の読者には、新鮮な驚きを与えることになるだろう。また、「源氏物語を探る」の「八 『雲隠』巻の謎」などは、一般読者が接することの比較的少ない文献上の問題が取り上げられており、新たに興味を引くところになると思われる。

昨今のブームともいうべき状況において『源氏物語』の入門書の類いは数多いが、ともすれば内容が通俗的な方向へ流れがちなものが少なくない中で、学問的な面白さを備えた本書の登場は大いに歓迎されよう。

（平成四年四月 小学館 四六判 二二〇〇円）